

日本語オノマトペ語彙の形態論的考察

A Morphological Study of Japanese Onomatopoeia Words

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

キーワード

〔接辞〕 Affix ・ 〔語頭要素〕 Prefixal elements ・ 〔接尾辞〕 Suffix ・ 〔接中辞〕 Infix
〔接周辞型要素〕 Circumfixal Onomatopoeia Markers

1. はじめに

日本語オノマトペ語彙においては語基にオノマトペ標識が加わって、初めて「完全な」語彙形式——つまり辞書見出し形——となる。角岡（2002a：35）で示した集計では、語基だけで辞書見出し形式となるのは1600語規模のデータベース^{*1}において僅かに26例と非常に少ない。オノマトペ標識と接辞には共通点が多い。この小論においては日本語オノマトペ語彙における接辞を検証し、オノマトペ標識との共通点および差異について検証する。

この小論での論の進め方としては、主としてオノマトペ標識が辞書見出し形のどの部分——語頭、語基の間、語末——に位置するかという基準で節立てを行う。一般的な形態素論の体系でいえば、語中の位置によって接辞は接頭辞・接中辞・接尾辞・接周辞の4種類が区別される。そして接辞は固有の意味を持たなければならない。一般語彙における形態素論のこの基準に従えば、オノマトペ標識およびそれに準ずる要素で接辞の基準に適合するのは接中辞と接尾辞のみである。

一般語彙では接頭辞は否定などの意味に関連し、接尾辞は品詞に関わると言えるであろう。中国語（漢語^{*2}）や英語においては次のような形態素的語形成過程が存在する。漢語「非現実的」という例では接頭辞「非」は否定の意であり、接尾辞「的」は用言を形成するための機能を担っている。英語でも同様に、形容詞unrealisticをun+real(ist)+ic^{*3}と分析することができる。中国語と英語は次のように全く同一の形態構造をなしている。

*1 このデータベースは、Takehi et al. (1996) の見出し項目を基礎として作成した。

*2 「中国語」と「漢語」は厳密に定義すれば区別されるべきである。「中国語」とは主として中国で行われている言語、「漢語」とは漢民族の言語、と解するのが一般的であろう。いずれも現代においては中国語北京方言を指すので、以下では同意義として扱う。

*3 形容詞形realisticの語幹をrealist「現実主義者」という名詞である仮定すると、語全体は「現実主義者的」という語形成と考えられる。ここでの名詞語尾-istは、意味的な関与よりも、real + icという形容詞語幹 + 形容詞語尾の連続を避けるため接辞された、と仮定するのが妥当であろう。

(1)

	接頭辞	語幹	接尾辞
中国語	非	現実	的
英語	un	real (ist)	ic

このように英語と中国語を対照した限りにおいて接頭辞と接尾辞は、かなり普遍的な存在であると考えられる。

しかしながら日本語は接頭辞に関して中国語や英語と異なるようである。中国語の「非」や英語のun-に相当するような否定の接頭辞は日本語には見当たらない。これは日本語における否定表現が「～でない」というように句末に表示されるという語順に起因するものと考えられる。例えば漢語「不幸」に相当する日本語表現は「ふ-しあわせ」あるいは「しあわせでない」という二通りの選択肢しか考えられない。「ふ」は漢語「不」と同一の接頭辞であるから、この造語法は中国語の直輸入と言える。「しあわせでない」という句末否定は日本語本来の統語法に沿っているものの、表現が長くなる上に最後まで聴かないと肯否極性が不明である、という隔靴搔痒の感が拭えない。接頭辞として語頭で肯否極性を明らかにする造語法に比べて、いかにも非効率である。結論としてはここで見たような否定表現に関する限りにおいて、日本語は中国語や英語に見られる「接頭辞」という範疇を欠いている、と言える。但し、次節で挙げる「まっしろ、ど真ん中」における語頭要素は日本語固有の接頭辞と考えられる。

日本語オノマトペ語彙における接辞（接中辞、接尾辞）および以下で触れる「リ延長強勢擬容語」の「促音または撥音＋リ」は一般語彙のように意味や品詞形成に関わる面と共に、一般語彙からオノマトペを区別するという要素も観察される。

日本語オノマトペ語彙においては、接尾辞と接中辞はオノマトペ標識と重複するものが多い。接中辞は、2音節語基（例えば「わさ」）の中に割り込む/N/（派生形は「わんさ」/waNsa/となる）のような例を想定している。接尾辞は、その大部分がオノマトペ標識である。オノマトペ標識以外で接尾辞と考え得るのは「-こ、-なん」などごく少数の語末形に限られる。これについて詳細は第3節で検証する。

一般形態素論で定義される「接周辞」とは、黒田（1967）の謂う「リ延長強勢擬容語」と外形的に共通点がある。

(2) CV Q/N CV り : /CVCV/-語基、2モーラ目の促音／撥音は第2子音が無声であるか有聲であるかによって決定される

この型においては、2音節語基の途中に促音または撥音が割り込むような形となる。更に第4モーラにオノマトペ標識と共通と考えられる「り」が置かれ、粋のような体裁を為す。このように不連続接辞という外観を呈するが、促音または撥音と「り」の組み合わせによって、個々のオノマトペ標識とは異なった意味が形成されているかという点、そうではない。それ故にこの型は「接周辞」と定義することはできない。この語形は、オノマトペ語彙を4モーラとする音韻的必要性によって派生されたと仮定するのが妥当である。この型の語彙については第5節で検証する。

語頭要素とは、笑い声などの擬声語において「語幹の発声を導く」という機能を果たす一群

を仮定する。この定義は上段に述べたような一般的な接頭辞の概念——意味や品詞形成に関わる——とは異なり、「母音またはそれに類する音」という音声面の性質で共通している。

このようにオノマトペ語彙における接辞とは、「①語基の前後または途中に位置し、②オノマトペ標識もしくはそれに準ずる独立モーラであり、③語全体の意味または語彙範疇に決定的に関与する」と定義することができる。定義中の「独立モーラ」には、反復や「り」など独立した音節も含む。オノマトペ標識またはそれに準ずる要素で、上記定義中「語の意味または語彙範疇に決定的に関与する」という機能に該当しないのが語頭要素（接頭辞）と接周辞型要素である。

2. 語頭要素

本節ではオノマトペ語彙の「語頭要素」について論じる。

「オノマトペ語彙における語頭要素」という範疇は、先行研究では深く議論の対象となっていなかったものと思われる。これは対象を「接頭辞」とするとより明確である。例えば村田(1993:102)は「日本語には接頭辞の付いた例は皆無である」と断定している。例外は小林(1942:143)で、以下の部類を「接頭辞」として掲げている。

- (3) ツぶとい ブンなぐる ガラあき チョロまかす ダンぶくろ ドン百姓
シャラクせえ イケすかぬ スッパぬく

語彙範疇としては、形容詞「ツぶとい、シャラクさい^{*4}」、動詞「ブンなぐる、チョロまかす、スッパぬく」、名詞「ダンぶくろ、ドン百姓」、形容動詞語幹「ガラあき」、連体詞「イケすかぬ」と分類できる。データベースで挙げている語形は、語彙範疇としては副詞と連体詞のいずれか、あるいは双方に属する。まず語彙範疇という観点で、(3)の部類は異質であるという点を指摘しておく。語源についても「オノマトペ起源」と推定するには疑問が残る。例えば「ブンなぐる」の「ぶん」は、「ぶち」の撥音化した接頭辞と考えるべきであろう（『広辞苑』の語源説明による）。その他各語彙項目の語源にまでは踏み込まないが、(3)所載の語彙は本節の議論で扱わない。

この節後半で検証するように、一般語彙に接辞する「ま、ど、す、つ」というような接頭辞はオノマトペ語彙においては共起制限に係る。本節前半で想定する語頭要素は、例えば漢語語彙における「非、不、未、無」のように「否定の意を表す」というような意味に関連した範疇ではない。この節で定義する「オノマトペ語頭要素」とは「あはは」という笑い声の擬声語において「ハ行」音に先行する母音というように、「語基反復の部分的先行」とでも分類すべき性質のものである。

*4 語彙列举に先立って、選定基準について次のように述べている（同書、106ページ、旧仮名遣いと旧字体は改めた）。

ここに資料選択の基準がある。

自己の「方言」しか問題でない。私にあってはそれは東京方言に属している。…（中略）…「しゃらくせえ」という語形も、この基準によって東京方言を忠実に再現したものと思われる。標準的な語形としては「しゃらくさい」として挙げておく。

オノマトベ標識「り／い」、Q、N、Rは語末に接辞されることが多かったので「接尾辞」として定義しても差し支えはないと考える。「わんさ」のN、「さっさ」のQのように「接中辞」的に語基に挿入される例も少数ながらある。

このようにオノマトベ語彙における音韻的・形態的単位としての接尾辞や接中辞の存在を仮定していくと、接頭辞的外観を呈する要素を語頭に持つ一群の語類が見られる。データベース中で上述のような語頭要素の可能性が考えられるのは次に掲げる一群の語彙である。

- (4) u-huQ, a-ha-a-ha, a-ha-ha, a-ha-ha-ha, aQha-aQha, aQ-haQ-ha, aQ-haQ-haQ-ha, aQ-haQ-haR, e-he-he, e-hen, e-hera-e-hera, hi-hiRn, i-hi-hi, o-ho-ho, o-hon, u-een^{*5}, u-hu-hu, u-hu-huQ, waQ-haQ-ha, waQ-haQ-haQ

一見してわかるようにこれら20例は、笑い声を模した類と咳払い、幼児の泣き声、馬の鳴き声という擬声語に限定される。そして「笑い声」と泣き声「うえーん」に共通しているのは、語頭要素が母音または渡り音/w/を持つ音節に限定されている点である。これら語頭要素の音韻的特徴は、一つの例外「うえーん」を除いて、語頭要素となっている音節の母音と語基の母音が同一であるという点である。これは、語頭要素と語基を通じての調音のし易さという音声的必然性から同一母音となっている可能性が考えられよう。これがもし*/o-ha-ha/というように異なった母音で調音されると奇妙である。この奇妙さは、開口度の差による調音困難さに起因するものである。

語頭要素に関して興味深いのは、/aQ-haQ-haR/に見られるように/a/にもオノマトベ標識Qが「接辞」されている現象である。音声的にはこの促音は、語幹/ha/の摩擦音と同化しており、1モーラ分の特殊拍となっている。この/aQ-haQ-haR/第1音節に見られる/aQ/を「語頭要素」/a/にオノマトベ標識Qが接辞した、と考える。これは促音の音象徴面よりも、笑い声を忠実に表記に再現したという側面で捉えるのが的確であろう。

笑い声の擬声語は(4)に掲げた語形から明らかなように語頭要素と語幹を通して、母音とハ行音と「ワ」音からなっている。これは日本に限らず、世界中ほぼ全ての人類に共通する生理的現象であろう。日本語において特異であるのは、擬音語という言葉での描写段階において笑い声と同質の音声的特徴を持った「語頭要素」の存在である。

この小論で新たに「語頭要素」という範疇を仮定する意義は、(4)に挙げてある語形からこれを除けば大半が完全な反復型になるという規則性を指摘したかった点にある。「ハ行」の5音はそれぞれ単独でも、日本語母語話者には笑い声を描写するための擬音語と即座に理解される。しかしながら母音の音質の差によって、どのような含意が為されているかというのは次のように大きく異なる。

*5 Hamano (1998: 39) では、「うえーん」の語形を/weeN/と音韻解釈している。Nの表記は成節子音を表わし、本論文の用法とも異なっている。このような音声的表記においては鼻子音を「オノマトベ標識」的に分析しているのではないように思われる。更に、「うえーん」の語基を1音節/we/と仮定している点においても本論文の趣旨とは一致しない。

- (5) 「は」：豪快な笑い。開口の大きさによる。
「ひ」：下卑た、隠微な笑い。開口の小ささによる。
「ふ」：含み笑いのように、独善的。開口度の小ささによるが、陰湿さはない。
「へ」：下品さを象徴する。/e/という母音の特質による。
「ほ」：上品さの象徴、女性に特有と考えられる。

このような「ハ行」5音の笑い声擬声語は、最も端的に日本語5母音の音象徴性を具現しており、興味深い。特に開口度の大小と関連が強い。前舌母音で調音される「ひ、へ」は、下品さや隠微さという負の価値観を象徴するのに対して後舌母音「は、ふ、ほ」は開口度の差によって豪快さ、上品さなど様態は異なるものの、いずれも正の価値観を帯びる要素が多い。日本語オノマトペ語彙における音象徴面では子音が主導的で、母音は補助的と指摘されている(Hamano (1998))。しかし笑い声の擬音語では(5)で見たように子音は/h/で固定され、母音が笑い方の様態の差異を表現するにおいて主導的である。

笑い声「へ」と関連していると考えられるのが擬態語「へらへら」である。「へ」は純粋な擬音語であるのに対して「へらへら」は照れ隠しや追従のために軽薄に笑ったり、真剣ではない態度を表現する擬態語の要素が強い。「へらへら(と)笑う」という引用形の他に、「へらへらしている」というように語彙化の程度が高くなる用語法も観察される。「へら」の「ら」を接尾辞と見なすことには無理があるので、語基は2音節形「へら」と仮定する。「えへらえへら」は、この「へらへら」に語頭要素「え」が加わったと考えられる。その理由は、「へらへら」と「えへらえへら」の表現する「不真面目で追従的」という様態が共通であるという点に求められる。

(4)に挙げた語群の「語頭要素」は、反復型の前に置いて発音を容易にしたり、単純な反復型に変化を持たせるという機能を担っているものと考えられる。

これ以降本節後半では、境界オノマトペに接辞され、ここまで検証してきた真正オノマトペ語彙の語頭要素とも異なる部類について論じる。

「すってんてん、すっからかん、つっけんどん」など一部の境界オノマトペ語彙には、語頭要素と考えられるような「す(っ)、つ(っ)」が見受けられる。また形容詞に接辞した「まっくる」の「ま(っ)」、名詞「ど真ん中」の「ど」のように純然たる接頭辞と考えるべき接辞例も少数ながら見られる。『大辞泉』によれば、「ど」は「まさにそれに相当するものであることを強調する」と定義されている(1860ページ)。「ま」は次に示すように数種類の定義がなされる(同書、2466ページ)。

- (6) ①うそいつわりのない、本当の、などの意を表す。
②純粋である、まじりけがない、などの意を表す。
③正確にその状態にある意を表す。
④動植物の名に付いて、その種の中での代表的なもの、標準的なものである意を表す。

「ど」の語源は俄には辿り難いが、「ま」は上述中①「本当の」意である「真」と考えられる。「ま」や「ど」という接頭辞が接辞されるのは真正オノマトペの範疇ではない。この差異を利用すれば、「す、つ、ま、ど」などの接頭辞が接辞される語形は真正オノマトペではない、と

いう基準を立てることが可能となる。

このように真正オノマトペと接頭辞に共起制限に係る理由として、次のような事情が考えられる。オノマトペはそれ自体が表現力に富んだ語彙範疇であるので、「す、つ、ま、ど」のような接頭辞によって、更なる強調を行うことに馴染まない。但しこの理由付けは絶対的なものではない。それは例えば今後の言語変化によって、真正オノマトペに接頭辞が接辞される可能性も残されている、というのが根拠である。

境界オノマトペ語彙の一部、例えば「素っ頓狂、素寒貧」などにおいては、接頭辞「素」の接辞される語形が無標であり、語幹のみの「頓狂、寒貧」は有標という例が見受けられる。語形成の過程から考えると、「素」は接頭辞として後から加えられたと仮定するのが順当であろう。しかし共時的には、接辞されない「頓狂、寒貧」という語形が奇異に感じられる。漢字表記の頻度からは、「素っ頓狂」は「すっとんきょう」よりも目にする機会が少ないが、「素寒貧」という漢字表記は「すかんぴん」よりも多い⁶。漢字表記は字面から意味が捉えやすいという反面、かな表記は音としての「意外性」のある促音、子音/p/が明示される点に特徴がある。促音は特殊拍として出現する音声環境に制限があるし、音素としての/p/も特に本来語では出現環境が厳しく制限される。「すっとんきょう」第2モーラの促音と「すかんぴん」第4モーラの/p/は、この理由によりこれら語彙にオノマトペ的語感を招来している。

英語では、ker-という接頭辞に後続する一群のオノマトペ語彙が存在すると指摘されている⁷ (田守・スコウラップ (1999: 43-46))。これが接辞される語群は、「何かにぶつかる時に発する音や、何かが激しく落ちたり、ある距離を進んだりする様態を表す」(同書) というように特定の意味を付加するために、ker-は接頭辞と考えられる。この接頭辞は後続する語基に関して制約を受けないので、臨時形 (nonce form) 的に語彙が形成される側面もあるようである。上掲 (4) において日本語における語頭要素付の語彙が定型化され特定の範疇の語彙に限定され、さほど生産性が高くない点と比較すると興味深い。

3. 接尾辞

この節で検討するのは、オノマトペ標識として確立するには無理としても「接尾辞」的存在として少数のオノマトペ語彙に出現する語尾である。オノマトペ標識として確立するに至らないのは、各語形あたりの語数が少ないというのが最も大きな理由である。次の理由として、あるパターンが特定のモーラ数の語にしか現われずモーラ数を越えた普遍性がないということが挙げられる。本節で以下の議論においては、促音・撥音・母音長化という3オノマトペ標識は対象から外す。

小林 (1942: 143) に「接尾辞」として「太ッちょ、やせギス、ろくすッぽ」の3例が挙げられている。この3例はいずれも「太い、痩せ (た)、緑な」という実詞に接辞しており、本節

*6 インターネット版朝日新聞記事データベースで検索した結果 (2005年7月13日)、「すっとんきょう」は95例に対して「素っ頓狂、素頓狂」合計で26例に過ぎなかった。他方で「素寒貧」14例に対して「すかんぴん」9例であった。

*7 同書によればker-の他に、ka-, co-, ca-, k-と種々の変種の綴りも見られるという (田守・スコウラップ (1999: 43))。このようにker-は接頭辞として綴りが一定でないというのは、英語のオノマトペ語彙は日本語オノマトペ語彙ほど体系的でないと言える根拠の一つであろう。

での「接尾辞」の定義から外れる。

この節で検証する接尾辞の特徴として、次節の4モーラ接周辞型要素語形における4モーラ目語尾との共通性を挙げることができる。これは「リ延長強勢擬容語」の「リ」についても指摘することが可能な共通点である。つまり接周辞型要素とは「接尾辞が単独で接辞された語形を基本として、後に接中辞が組み合わさって4モーラ語形を形成する」と定義するのが妥当であろう。

出現頻度の多さという観点からまず「ら」という語尾に着目する。データベースでは以下の5例において確認される。

(7) ぎっちら ふっくら ちょっくら うっすら うつらうつら

「ちょっくら」の語基は「ちょ」と「ちよく」の二通りの可能性が考えられる。「ちょっくら」の表現する様態から類推すると、派生形「ちょいちょい」などの語基「ちょ」と共通している。しかし語基を「ちょ」と仮定した場合、語尾を「くら」／「ら」いずれに解すべきかという新たな課題が生じる。結論としては、語基を「ちよく」と考える。(7) 所載の他の語彙との共通性から言えば「ら」のみを語尾と解釈した方が簡潔であるというのが、この判断の根拠である。語基を「ちょ」、「くら」を語尾を見なす場合、他に類例がないこと、「くら」2音節を一纏めと扱うか、または「く+ら」と分節するか、など課題が複雑である。語基を「ちよく」と仮定すれば語尾の処理は「ら」のみとなつて問題はないが、「ちょっくら」と「ちよくちよく」では描写している様態が異なる。「ちよくちよく」という反復型は、ある状態が生起する頻度に言及しており、この意味での反復型「ちょいちょい」と共通である。「ちょい」の語基が1モーラ形「ちょ」であることは自明である。

3語形「ぎっちら、ふっくら、うっすら」は、それぞれ「ぎっちり、ふっくり、うっすり」と意味が共通で、語尾「ら」－「り」の交替が見られる。ほぼ同様の意味を表現するのにこのように交替形が存在する、というのは不経済であるように思われる。後段で検討するように語尾「ら」－「り」の交替には通時的変化が関係している。語基はそれぞれ「ぎち、ふく、うす」である。このうち「うす」は形容詞「うすい」の語幹「うす」から派生したものであろう。他方で「ぎち、ふく」は、真正オノマトペ語基と考えるべきであろう。

「うつらうつら」の語基「うつ」は、同じく仮眠の状態を描写する語基「うと」と第2母音の交替による。語基「うと」からは「*うとらうとら」というような語形は派生できない。逆に語基「うつ」から派生されるのは「うつらうつら」という1形のみである。

このように語尾「ら」は5例において確認されるが、「うつらうつら」は反復6モーラ語形である。他方「ぎっちら、ふっくら、ちょっくら、うっすら」は共通して第2モーラがQ、第4モーラが「ら」という4モーラ語形である。このような語形は/CVQCVra/と表示することができ、第1節(2)に掲げた「リ延長強勢擬容語」の語形に準ずる。反復型、4モーラ型とも形態面からは「日本語オノマトペ語彙の典型的な語形を体現している」と言える。音韻的には「ら」はオノマトペ標識「り」と母音交替となっていることから、「り」と「ら」の交替についてなんらかの規則が導き出される可能性も考えられる。

山口(2002:40)では、通時的観点から次のように説明されている。

- (8) この語末のラ行音が、奈良時代には[ABラ][ABロ]に見るように「ラ」「ロ」のみで、「リ」の型はありません。(中略)

江戸時代以降では、「ラ」「ロ」のつく語形の擬音語・擬態語は、化石的に残るだけになり、もっぱら「リ」のつく語形が活躍するようになり、現在に至ります。

口の開き方の広いのんびりした「ラ」「ロ」から、口の開き方が少なく鋭い「リ」へという変化の後には、人間社会のあり方の象徴のようにも思われます。

この総括に先立つ事例として語尾「ら・ろ」の接辞する「とどろ・ほどろ、かわら・もゆら」が挙げられている(34-35ページ、図3)。これら四例は上掲(7)に比べても更に古風で、Kakehi *et al.* (1996)には収録されていない。上掲(7)の語類も接尾辞の一種「ら」が付加されているものと考えられるが、「ろ」接辞はデータベースには見あたらない。

僅か5例であるが、(7)所載の語尾「ら」語形の直前音節母音——即ち語基/CVCV/の第2母音——を分析してみると、高母音/iu/の2種類であり、中低母音/e o a/の三つは見られない。微睡みの様態表現語基「うと」から第2母音交替によって「うつ」という語基を導いたのは、あるいはこの母音/o/の忌避、という事情があったのかもしれない。語基「うつ」からは反復型「*うつうつ」が派生されない、というのが傍証である。オノマトペ語彙は完全反復型が圧倒的に多いにもかかわらず、「うつ」のように特定の語基において反復型が回避され、「うと」という母音交替による別語基を立てる、というのは原因を探れば興味深いであろう。

次に「かん」という語尾について検討する。これは「あっけらかん、ひっそりかん、すっからかん」という3例に出現する。それぞれ/aQkera-kan/, /hiQsori-kan/, /suQkara-kan/と分節するのが妥当であろう。「ひっそりかん」の「かん」については「閑」の字が適すると思われる。山口(2003:429)は、『ひっそり』に同じ意味を表す漢字の『閑』をつけて、意味を強めたもの」と説明している。一方「あっけらかん」は、態度が天衣無縫で開き直ったかのような様態を表現しているので「閑」字が相応しいか否か、「ひっそりかん」に比べると疑問が残る。傍証としてこの語形に、「あけらけん、あ(っ)けらこん、あけらひょん、あけらほん、あけらぼん、あげらほん」など種々の語形が錯綜し(山口(2003:8))、いずれが無標であるか判じ難いという点を挙げておく。語末形だけを比べてみても「-かん、-けん、-こん、-ひょん、-ほん、-ぼん」と6種類が混在している。しかもこれらは他のオノマトペ語彙には見られない語末形である。

更に「すっからかん」となると、意味的に適切な漢字を当てるのは困難であろう。第2節で検証したように語頭の「す」は接頭辞であろうし、語幹は実詞の「から」である。「かん」はこの語幹と頭韻を踏むために追加された、と考えることも可能であろう。事実上、この3例に共通する「語尾」としての「かん」という音型のみである。これは語尾「かん」をオノマトペ標識と見なすことが不可能である重大な理由の一つであろう。

「なん」という語末の形は、「ちょこなん」にだけ出現する。この語の語基は「ちょこ」である。この語基の意味としては「表現している対象が小さい／愛らしいという印象を与える」というような様態を表している。この語基からの他の派生形としては、オノマトペ標識Nを付加した「ちょこん」という形と反復型の「ちょこちょこ」がある。「ちょこなん」から「ちょこ」を除くと「なん」という形が残る。これを語末の語形の一つとする。「ちょこなん」という語形には、小さいものが鎮座しているという語感がある。

語末形「ねん」は「ぼつねん」と「つくねん」に出現する。「ぼつねん」の語基は、「ぼつ」という形である。「ぼつ」という語基からは、「ぼつり、ぼつん」などの語が派生される。まず「ぼつねん」から語基「ぼつ」を除いて語尾の「ねん」という形を得る。同様に「つくねん」から「ねん」を除くと、語基は「つく」という拘束形になる。「つく」という仮想語基に、どのようなオノマトペ標識を接辞してみても、データベースに現われるような語形にはならない。従って「つく」は拘束形語基である。しかし「ぼつねん」と「つくねん」には、「孤独」を感じさせる共通した語感がある。「なん」と「ねん」は/nVn/の母音のみが交替した音型で、同一形から派生したという可能性も考えられる。

「ぺたんこ、ぺちゃんこ、ぺしゃんこ」にの3語に共通である3モーラ目N+4モーラ目の「こ」という語形は、4モーラ以外の語には見られない。^{*8}この「N+こ」という語形が、「ぺしゃんこ、ぺちゃんこ、ぺたんこ」の3語に現われる。この3語は第2モーラの子音が/sy/-/ty/-/t/と交替している。この3語の基底形は「ぺたんこ」とであると仮定する。「ぺちゃんこ」は第2子音に硬口蓋化オノマトペ標識が適用された語形であり、「ぺしゃんこ」は「ぺちゃんこ」から、子音を摩擦音化することによってできた語形である。意味を考えると、「平になる／平である」という様態を表しているのは、語基の「ぺた」という形である。各派生形から語基「ぺた」を除くと「N+こ」という語尾が残る。この3語における「N+こ」は連続している。Nは通常のオノマトペ標識（音声的には撥音）であるとして、「こ」が独自の語尾である。これはオノマトペ標識に語尾「こ」が連続する、という意味で「二重の語尾」と見なすべきかも知れない。

本節では交替形語形は考察の対象としていないが、「びんしゃこ」の「こ」も「ぺたんこ」などの語尾と同一である可能性が考えられる。「びんしゃこ」は二つの語基「びん、しゃん」が組み合わさった語形「びんしゃん」に「こ」が接辞した「*びんしゃんこ」を前提とし、第4モーラの「ん」が除去されたと仮定している。

以上の「語尾」の形は、いずれも特定の意味を持つ語彙にだけ出現する。範囲が限定され、同類の語形が少ない分だけオノマトペ標識ほど生産力がない。語形が出現する語数は少ないが、派生形から語基を除くという手順によって確定されたものであるから、一定の語末の語形として分類する意味はある。山口（2002）の通時的考察によれば、オノマトペ標識として括ることが困難であるこれら語尾は、古い時代の「化石的存在」として説明のつく部類が一定程度を占める。

4. 接中辞

本節で考察する「接中辞」とは、2音節語基/CVCV/に割り込むオノマトペ標識NまたはQを指す。従ってここで定義する語彙は/CVN CV/または/CVQ CV/という3モーラ語形となる。母音長化が語基途中に割り込むと、「ゆーらゆら」というような派生形が例として挙げられる。この語形は「ゆらゆら」の強調であり、この類は辞書に見出し形として収録されない。また、反復と「り」は接中辞とならない。反復は、語基全体を単位として適用するもので、語基途中

^{*8} 但し強調形として第2モーラにオノマトペ標識Qを挿入して、「ぺっちゃんこ」「ぺっしゃんこ」などとすることはできる。この場合は語全体としては5モーラになっている。

に割り込むことはあり得ない。「り」も同様に語基途中に割り込むことは出来ない。こうしてオノマトペ標識五種類のうち可能性として否定される部類を排除すれば本節で「接中辞」として検証するのは、促音と撥音である。

1音節語基の不完全反復型、例えば「かっか」の第2モーラQは、上記の定義によると接中辞ではない。「かっか」の語基は1モーラ「か」であり、語基反復の中間に促音Qが割り込んだ不完全反復という外観を呈している。完全反復ならば「かっかっ」という語形となるが、これは「怒っている」という語義から外れる。「まんま」は、語源説明に「うまうま(と)」からの変化、とあるので接中辞の定義から外れる。そうするとデータベースでは次の17語が該当する。3モーラの非反復型が7例、6モーラで反復型が10である。

- (9) 3モーラ語形：/doQka/, /haQsi/, /haQta/, /muNzu/, /suQku/, /waNsa/, /zaNbu/
 6モーラ反復型：/baQsa-baQsa/, /baQta-baQta/, /boQsa-boQsa/, /gaQpo-gaQpo/,
 /kaQpo-kaQpo/, /noQsi-noQsi/, /noQso-noQso/, /suQpa-suQpa/, /yuQsa-yuQsa/,
 /zaQku-zaQku/

6モーラ反復型は、反復を解除すれば3モーラ語形に還元することができる。3モーラ語形では第2モーラが促音または撥音であり、これを除去すれば語基形が得られる。「はった」と「ばったばった」からは共通の語基「はた」が得られる。この2語形を1語基と数えれば(9)の17語形は16語基に還元される。これら16語基のうち「はし」を除いては、(9)所載の語形以外にも派生形ができる。3モーラ／非反復語基と、6モーラ反復語基に分けて以下に掲げる。「ばったばった、ばっさばっさ、がっばがっば、ざっくざっく」の語基は、それぞれ第1子音無声の/hata/, /pasa/, /kapo/, /saku/と仮定する。

- (10) 3モーラ語／非反復語基
 /doka/: doka-doka, dokaN, dokaQ, dokari, dokaRN, doQkari
 /hata/: baQtaN-baQtaN, baQtari, bata-bata, bataN, bataN-bataN, bataQ, batari, hata,
 hata-hata, pataN, pataN-pataN, pataQ, patari, patari-patari
 /muzu/: muzu, muzu-muzu
 /suku/: sukuQ, suku-suku
 /wasa/: wasa-wasa
 /zabu/: zabuN, zabuN-zabuN, zabuQ, zaburi, zaburi-zaburi, zabuRN, zabu-zabu, zaNburi

 6モーラ／反復語基
 /bosa/: bosa-bosa, bosaQ
 /kapo/: gabo-gabo, gaboQ, gaQpori, kapoQ
 /nosi/: nosi-nosi
 /noso/: noQsori, noso-noso, nosoQ, nosori, nosori-nosori
 /pasa/: baQsari, basa-basa, basaQ, basari, basari-basari, pasa-pasa, pasaQ, pasari
 /saku/: sakuQ, sakuri, sakuri-sakuri, saku-saku, saQkuri, zakuQ, zakuri, zaku-zaku,
 zaQkuri

/supa/: supaQ, suQpari, supari, supa-supā, zubaQ, zubari

/yusa/: yusaQ-yusaQ, yusa-yusa

このように語基が反復される場合とされない場合に分けると、両者の差が明確となる。「はた」は双方に該当するので集計から除外する。3モーラ／非反復語形の語基からは平均4.17の見出し語が派生されるのに対して、6モーラ／反復型となる語基からは平均5.75語が派生される。このような生産性の差には音声的要素が潜んでいる。非反復語基には無声阻碍音語基から有声化によって辞書見出し形が派生されるという過程が全く見られない。対して反復型語基では /kapo, pasa, saku, supa/ が両子音無声である。この一方あるいは双方が有声化されることによって多くの見出し形が派生される。

このように「非反復語形の語基の生産性は低い」という事実から「当該語彙が固定表現である」という推論が成立する。(9) 所載の3モーラ形語彙において2モーラ目にオノマトペ標識が挿入されているが、このような特殊性故にこれら語彙は独特の語感を持っている。どこか古風に響く、というのは生産性の低さと関連しているように思われる。加えて(9)の3モーラ語形は、これを反復して6モーラとする、というような発展性はない。この点においても、3モーラ語形が固定的で特殊であることが窺える。これは、反復型として存在する6モーラ語形と切り離して考慮せねばならない。接中辞型の反復は、そうでない反復型と共通性が認められる。例えば「ゆっさゆっさ」は「ゆさっゆさっ、ゆさゆさ」と同様、地震等において揺れる様態を表現している。

また(9)の17語彙は全て擬態語であり、特定の様態しか表現しないという点でも共通している。例えば「どっか」と言えば「腰を下ろす」としか続かないし、逆に「すっく」は「立ち上がる」と続く。データベースでは、これら17語彙は全て擬態語の単一定義であった(語基の表わす多義性の質・量的検証については角岡(2003)を参照されたい)。

これらを総合すると全体としてオノマトペ語彙における「接中辞」というのは、オノマトペ標識を含む「接尾辞」ほど生産性が高くない、と言えるであろう。因果関係の観点からは、接中辞という形式の特殊性故に様態表現においても「他の派生形を形成しない」という閉鎖性が招来されたのか、あるいはその逆であるのか、いずれとも判じ難い。

5. 接周辞型要素

世界の諸言語において、「接周辞」はその存在自体が稀少である。『言語学大辞典』(第6巻)では、「共接辞」(confix)という見出しで若干の説明が加えられている。そこではタガログ語における動詞活用が例として紹介されている。他に、アジア大陸北東端に行われるチュクチ語の随格名詞や、ニジェール・コンゴ語族における名詞類別辞が断続形態素となる例が個別言語の説明で加えられている。日本語においては「お父さん」のような語構成も共接辞と見なしている。接周辞あるいは共接辞は、類型論的形態論の観点からは稀少性が認められて興味深い、言語間の対照など詳細は別の機会に譲る。

黒田(1967)は第1節(2)で示した4モーラ形式の語群を「リ延長強勢擬容語」と定義している。この形式の語はデータベースに131語収録されている。数としては、反復型、オノマトペ標識Q接辞、「リ」接辞形に次いで多い。ここでは、この形式の2モーラ目(促音または

撥音)と4モーラ目(「り」)が2音節語基の2音節目を取り囲む、という意味で「接周辞型要素」と捉える。「リ延長強勢擬容語」以外でも、同様の派生過程が観察される。これらはいずれも4モーラ語形に特有であり、2音節語基から派生される。本節後半では、4モーラ語形において第2モーラがNまたはQ、第4モーラが「り」以外の語末形である語形を分析する。

本節前半では「リ延長強勢擬容語」の語基が示す生産性——即ち各語基から辞書見出し形がいくつ派生されるか——について検証する。データベース収録語彙から語基を抽出し、当該語基から派生される語形数を集計すると次のようになる。

(11)

派生数	1	2	3	4	5	6	7	
頻 度	33	14	14	15	9	10	9	
派生数	8	9	10	12	13	16	17	18
頻 度	8	5	5	1	2	1	1	1

合計すると128例について分析しているが、/guNnari, guNnyari/など同一語基に帰着する例が含まれているので本節で挙げたこの型の語数(131)とは一致しない。語基が128で派生語形数総計が579、平均すると1語基当たり4.52語形が派生される、という結果である。

比較のために、同様の集計を全体で行う。次表は、(11)を含んだ集計である。角岡(2001)のデータベースより集計した。

(12)

派生数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
頻 度	192	70	40	38	24	22	16	17	9
派生数	10	11	12	13	16	17	20	21	24
頻 度	9	2	2	3	4	1	1	2	1

全体では453語基で派生形総数は1527となる。1語基当たりの平均は3.37派生形、という結果である。顕著と思われるのは、全体で453語基のうち、42.38%に相当する192語基が拘束型である——即ち1語形の派生しかない——という点である。これは上掲(11)における比率25.78%に比べると高い。1語基当たりの平均派生語数に着目すると、リ延長強勢擬容語語基の方が全体での語基よりも多くの派生形を生み出している。

他方で、分布について統計的検定を行う。全体を母集団とし、リ延長強勢擬容語が分布においてこの母集団から乖離しているか否かに着目する。帰無仮説を「これら二集団は同様の分布と見なされる」とし、有意差1%水準でt検定を施すと、帰無仮説は維持される⁹⁾。従って、リ延長強勢擬容語も、語基から派生される語数の分布に関しては母集団たる全体と同様であるという結論が導かれた。二集団とも、派生形が一つ——この場合語基は拘束形である——という階層が最も多く、以後の階層においては漸減傾向を示す。換言すれば、単一語基からの派生形が多くなればなるほど、そのように生産性の高い語基の数は減るという傾向を示している。

全体として、リ延長強勢擬容語の語基は生産力が相対的に高い、と言えるであろう。そうすると、この型は「接周辞」としてオノマトペ標識の組み合わせ以外に独自の意味を持つ、とい

*9 t検定の結果は1.64であり、t境界値2.54を下回る。

う推論は不可能であろう。

以下、個別項目の検討に移る。

「N+か」は「ほんわか」にだけ出現している語形である。この語の語基は「ほわ」という形であると仮定する。「ほわ」を語基とする派生形は「ほんわか」以外にはないが、語基「ふわ」は「ほわ」と第1母音が交替しているのみで、表現している様態は「ほわ」と「ふわ」において近い。双方共に、表現している対象となる「もの」あるいは雰囲気などが柔らかいという共通点が認められる。派生形「ほんわか」から語基「ほわ」を抽出すると「N+か」という形が残る。「N+か」という形も他の派生形には見出されないが、上のような手順で語基を除くことができるので、語尾として確定しても差し支えなからう。Nは、語基の途中に挿入されるようになっている。一方「か」は語基をはさんで語末にあるので、Nと「か」は連続しない形になっている。この語形も語基「ほわ」にN+「か」が接周辞型要素的に接辞していると考えられる。

外見上、語基の中間に割り込むQ+語尾「ち」という語形を呈しているのが「せっかち」である。角岡（2004）で検証したように、この語の語源は「急き+勝ち」というように分節される。「急き、勝ち」共に実詞である。共時的には「急き」の第2音節「き」が促音に変化したために、オノマトベ的語感が高まったと言える。そうすると「ち」という語末形が一種の接尾辞のように見えてくるが、これは語源的には「勝ち」という実詞の一部である。この語は、オノマトベ的語感と語源が相反する、という例と言える。

大阪方言の例であるが、「いらち」という語形がある。『日本国語大辞典』では、動詞「いらつ（苛）」の連用形の名詞化、と説明されている。意味は、「せっかち」と同じで短気な人間を指す。「いら」は「いらいら」という派生形のもとになるオノマトベ語基である。「いらち」という形に語末の「ち」があり、「せっかち」と同じように人間を表す語尾になっているものと考えられる。但し「いらち」においては、「せっかち」のように第2モーラにオノマトベ標識Qが入る形にはなっていない。これは語基「いら」の第2モーラの子音が/r/であって、促音の直後としては調音しにくい音であるという音声的な理由が考えられる。「いらち」の語源は「いら+勝ち」とは考え難い。語末の「ち」は「せっかち」の類推で形成された語形であろうか。「いらち」の「ち」は名詞語尾のような外観を呈している。

このように「せっかち」以外で語末が「ち」となっている語を探してみると、他にも「でっかち」などが見られる。「でっかち」の語基は形容詞「でかい」の語幹「でか」と考えるのが妥当であろう。そうすると「ち」は語尾であるという推論が成立する。「いらち、でっかち」などの語形が「せっかち」を模倣して成立したか否かは定かではないが、これら一見語末が共通する語形について通時的探求が必要であろう。

語基の途中にQ+語尾「か」という形が語基交替形「しっちゃんめっちゃか」において見られる。この語形の前半「しっちゃん」は拘束型形態素である（語基は「しちゃん」）が、後半「めっちゃか」は語基「めちゃん」から派生している。語基「めちゃん」の間にオノマトベ標識Qが挿入され、語末の第4モーラに語尾「か」が配された、という語形成過程を示している。この語形も接周辞的に形成されたと思えるのが妥当であろう。

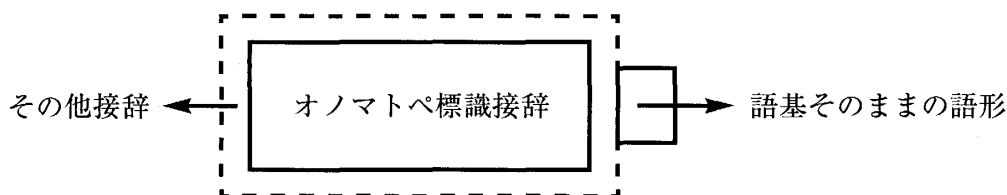
このように「リ延長強勢擬容語」における「N/Q+り」という典型的型式以外にも接周辞型要素と考え得る接辞が見られた。但しいずれも数が少なく散発的で、語形としての生産性に

は乏しい。

6. むすび

この小論では以上のようにオノマトペ標識以外の接辞について検証を加えてきた。日本語オノマトペ語彙全体を形態的観点から区別すれば、語基そのままの語形である一群（語基見出し形）となんらかの接辞が付加された群に二分することができる。更に接辞は、オノマトペ標識とそれ以外に二分される。これを広義のオノマトペ標識とその他の接辞（的要素）を含め、各群の語彙数の多寡を反映させて図示すると次のようになる。

(13)



オノマトペ語彙全体から見ると、オノマトペ標識が接辞されている語形が圧倒的に多い。これには、反復語形も含まれる。オノマトペ標識以外が接辞される語形は、総数で25程度である。この数は、語基見出し形の数とほぼ一致する。

この小論では、日本語オノマトペ語彙を文字通り取り巻く接辞について検証した。オノマトペ標識を含む接尾辞が数的にも形態論的にも無標であり、派生される辞書見出し語形も多い。同様に、オノマトペ標識を語基の途中に割り込む接中辞と定義することにも疑問の余地はないであろう。また、リ延長強勢擬容語は第2モーラのQまたはNと第4モーラの「り」が接周辞型要素を形成する、と規定するのが合理的である。

以上3種類の接辞もしくはそれに準ずる部類はいずれもオノマトペ標識と関連が深いが、その規範から外れるのが第2節で「語頭要素」として扱った一群である。これら語頭要素は、主として笑い声に現れる母音（または母音に類する音）である。この部類が他の接辞と異なるのは、「あはは」の「あ」などがなんら意味的な機能を持たず、後続する笑い声の発生を容易にするという音声的側面のみであるという点にある。こういう母音の類を語頭要素として分析すれば「あはは」の「は」は語基として処理できるという利点が生じる。

結果として日本語オノマトペ語彙における接辞及びそれに類する要素を見出し語形中の位置という観点で総括すれば、語頭要素・接中辞・接尾辞・接周辞型要素の4種類が揃うこととなる。このように語彙項目での位置に着目すれば変化に富んでいるが、一般的形態論という基準から接辞と定義されるのは接中辞と接尾辞のみである。

参考文献

- Hamano, Shoko. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- 堀井令以知 (1973) 『日本語語源辞典』 東京：東京堂出版。
- 角岡賢一 (2001) 「日本語オノマトベ語彙派生過程における語基」『龍谷大学国際センター研究年報』第10号。pp.43-68
- 角岡賢一 (2002a) 「日本語オノマトベ語彙の接辞」『龍谷大学国際センター研究年報』第11号。pp.35-61
- Kadooka, Ken-Ichi. (2002b) "Onomatopoeia Markers in Japanese." in *LACUS FORUM* 28. Linguistic Association of Canada and the United States. pp.267-275.
- 角岡賢一 (2003) 「日本語オノマトベ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター研究年報』第12号。pp.23-44
- 角岡賢一 (2004) 「日本語オノマトベ語彙の語源について」『龍谷大学国際センター研究年報』第13号。pp.15-36
- 角岡賢一 (2005) 「日本語オノマトベ語彙の交替形語彙分析」『龍谷大学国際センター研究年報』第14号。pp.39-57
- Kakehi, Hisao. (1986) "The Function and Expressiveness of Japanese Onomatopoes." *Bulletin of the Faculty of Letters, Kobe University*.13 pp.1-12
- 笈壽雄 (1993) 「文学作品に見られるオノマトベ表現の日英対照」笈・田守 (編) 『オノマトピア』 (1993) 所収。pp.127-144.
- 笈壽雄、田守育啓 (編) (1993) 『オノマトピア』 東京：勁草書房。
- Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori and Lawrence Schourup. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 小林英夫 (1942) 『言語学方法論考』 (再版) 東京：三省堂。
- 黒田成幸 (1967) 「促音及び撥音について」『言語研究』50。pp.85-99.
- 松村明 (監修) (1995) 『大辞泉』 東京：小学館。
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- 村田忠男 (1993) 「日本語のAB型オノマトベ・重複形・等位構造表現の関係」笈・田守 (編) 『オノマトピア』 (1993) 所収。pp.101-125.
- 那須昭夫 (1998) 「強調形オノマトベの韻律構造」関西音韻論研究会における口頭発表。
- 日本大辞典刊行会 (1979) 『日本国語大辞典』 東京：小学館。
- 新村出 (編) (1983) 『広辞苑』 (第三版) 東京：岩波書店。
- 田守育啓 (1991) 『日本語オノマトベの研究』 神戸：神戸商科大学。
- 田守育啓 (2002) 『オノマトベ 擬音・擬態語をたのしむ』 東京：岩波書店。
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味』 東京：くろしお出版。
- Waida, Toshiko. (1984) "English and Japanese Onomatopoeic Structures." in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*. Vol.36. pp.55-79.
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた』 東京：光文社。
- 山口仲美 (編) (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 東京：講談社。